

サタデー コラム

重ね、今年で15回目となるスタートしました。

そのきっかけは、桂三重ね、参加者も右肩上が枝(現文枝)師匠から当り、第15回の今年は全時の岐阜市長だった細江国51大学・大学院から2茂光氏に、学生落語日本44人の学生が参加する、岐阜市を代表するビッグイベントに成長しま

現状です。

学生にとって体育会系の全国大会はたくさんありますが、文化系のもは少ない中で、この策伝大賞は希少価値があり、存在感ある大会となっています。このように盛大かつ岐阜から全国に発信する一大イベントとなつた背景には官民による

員としての参加です。お引かれます。

また、テレビや新聞などメディアの発信力で大きな反響を呼び起こしてきました。

さらに岐阜市行政の取り組みも大きな要因です。この大学落語日本一を決めるイベントを市長自らが先頭となり、担当する商工観光部が一丸となつて育てようというス

タンスが好結果をもたらしました。以上数々のフ

オローの要因がかみ合

い、好循環することで相乗効果を上げ、策伝大賞はますます発展し、岐阜市を全国にとどろかせるイベントとなりました。

小生も第1回から参加し、実行委員会会長としての10年間務めさせていだいていますが、これまでの15回の歴史と伝統を礎に、さらにこの策伝大賞が大きく発展することを期待します。

中村正・秋田屋本店社長

策伝大賞に希少価値

立春は過ぎましたが、今年は格別に寒い年です。冬季オリンピックが韓国平昌で開催されている中、岐阜市では2月17、18日に恒例の全日本学生落語選手権策伝大賞が開催され、落語で寒さを吹き飛ばす熱き戦いが繰り広げられました。

策伝大賞は歴史を積み

提案がされ、実現しました。

平成16年2月に全国29大学、76人の落語を愛する学生が岐阜に集結し、舞台となる長良川国際会議場で第1回が華々しく

した。エンタリーが多過ぎるため、第11回からはビデオによる1次審査を実施するようになり、17

日の予選会では1会場61人、4会場で計244人の出場に絞っているのが

協力体制、そして何よりあり、憧れであります。決勝大会後に夕食を共にしながらの意見交換会や、決勝の翌日に行われ

る落語の看板桂文枝、立川志の輔両師匠の審査と、一層両師匠の魅力に



なかむら・ただし 1951年、岐阜市生まれ。博士(医学)。県経済同

友会筆頭代表幹事。岐阜南法人会長。県製菓協会長。みつばちの家理事長。県養蜂組合連合会長。県研究開発財団評議員。岐阜放送番組審議会委員長。県フェンシング協会会長。県立岐阜北高校同窓会長。